

Title	ルソーとシアトロクラシー : 『ダランベール氏への 手紙』における「見せもの(スペクタクル)」の近代 性
Author(s)	田中,均
Citation	a+a 美学研究. 2018, 12, p. 28-41
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90111
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

029

ルソーとシアトロクラシー

―――『ダランベール氏への手紙』における「見せもの」の近代性

アトロクラシー)[テ]の問題を継承し、さらにそれを新たな問題意識から定式化しなおしたテクストとして分析し、 な集団的な競技や祝祭がふさわしいと論じている。本稿は『手紙』を、『法律』における「テアトロクラティア」(シ 上で、ジュネーヴには劇場での演劇に代わる別の「見せもの」(スペクタクル)、すなわち市民自体が主人公であるよう は、不平等と利己主義に病む大都市パリの堕落した習俗と、より平等な小都市ジュネーヴの素朴な習俗とを対比した 五七年)において、 (Lettre à M. d'Alembert sur les Spectacles)(一七五八年)(本稿では以下『手紙』と呼ぶ)について検討する。よく知られているよ 編として、ジャン=ジャック・ルソー(|七|二—|七七八)の著作『見せものについてのダランベール氏への手紙』 本稿は、 芸術と政治、 『a+a美学研究』第十号に掲載された拙稿「プラトン『法律』における「テアトロクラティア」」の続 都市国家ジュネーヴに劇場を建設することを勧めたことへの反論として書かれた。そこでルソー ジャン=ル=ロン・ダランベール(一七一七一一七八三)が『百科全書』の項目「ジュネーヴ」(一七 観客と共同体についてのルソーの思想を解明する[*]。

Summary

Rousseau and Theatrocracy Modernity in Rousseau's Letter to M. D'Alembert on Spectacles

Hitoshi TANAKA

In this essay, I interpret Jean-Jacques Rousseau's *Letter to M. D'Alembert* as his response to Plato's *Latus*, especially to the arguments on "theatrocracy" (rule by the spectators in a theatre). While Rousseau as well as Plato proposes a participatory form of performance without the division between actors and spectators, his concept of "participation" is coined by modern individualism. Rousseau argues

that a government is able to influence people's taste and customs, not by legal enforcement, but only by manipulating public opinion, because the desire for honor and recognition has made the moderns so dependent of others' opinion. For the citizens of Geneva, Rousseau plans "spectacles" as sports competitions (based on military training) and balls for youth (arranged as matchmaking events) that celebrate the best performers publicly; he intends to institutionalize the struggle for honor and recognition so that people's egoistic motivations promote the public interests. It is true that Rousseau also depicts ideal scenes of festive gatherings united by pure and natural sympathy. However, his concept of spectacles corresponds to the reality of modern individualism.

の」のあり方を提示している。特に、どちらの場合も、 り方から、 歌舞ないし演劇における演者と観客との関係について批判的な考察を行ったうえで、あるべき歌舞ないし「見せも 市民が観客にも演者にもなるという新たなあり方への移行を構想している。 両者の議論が類似していることは容易にわかる。どちらの場合 観客が舞台から分離されて舞台上の出来事を眺める従来のあ

が一致することを、リズムとハーモニーに乗せて歌うとされた。 らない。この集団的な歌舞においては、最年長の世代をのぞくポリス共同体の各世代が、 えて「アテナイ人」は、クレタ島にあたらしく建設されるポリス「マグネシア」における歌舞のあり方について提案 客は沈黙するように強制された。しかし、このような秩序は長続きせず、観客が自分の快だけを基準として歌舞を賞 観客とが分けられ、 『法律』に登場する「アテナイ人」によれば、デモクラシーが成立する以前のアテナイにおい ・非難する、アナーキーな「観客の支配」としての「シアトロクラシー」が成立したのである。 それによれば、 歌舞の善し悪しは、 歌舞は「ポリス全体からポリス全体に対して」、演者と観客との分け隔てなく演じられねばな 理性ある年長者が、伝承された法にしたがって判定すべきであるとされ、 理性的な法と感覚的な快 ては、 以上の経緯をふま 歌舞の演者

的に示す箇所を以下に引用しよう。 演者と観客の分離を廃棄するという議論は、むしろ『手紙』におけるもののほうがよく知られている。 それを典型

田中均

幸に涙したり、 誰もが孤立しています。人々はそこで自分の友人、隣人、近親者を忘れて、 〔演者と観客が分離された演劇の場合には〕 生者をばかにして笑ったりするのです (16)。 人々は見せもののために集まっ 作り話に興味を持ったり、 ていると思っていますが、 そこでは 死者の不

こめ、 福な人民のみなさん、 ましい光景、そういったものだけを見せるような見せものを決して採用しないようにしましょう。 〔ジュネーヴ共和国にもたしかに見せものが必要ではあるが〕しかし、悲しいことに少数の人を暗い洞窟に閉じ のは、 その人々を沈黙と無為の状態で臆病でこわばったままにして、障壁、剣先、兵士、隷属と不平等という痛 野外、 大空の下でなければなりません (114)。 みなさんの祝祭はそこにはありません。 みなさんが集まって、 幸福の甘い感情に身を委ね そうです、 幸

観客自身を俳優にしてください。誰もが他人のうちに自分を見いだして自分を愛することで、 を得られます。もっとよいことをしてください。観客を見せものにしてください (Donnez les Spectateurs en Spectacle)。 広場のまんなかに、 り一層統一されるようにしてください(115)。 花冠をかけられた杭を一本立ててください、 そこに人民を集めてください、 すべ そうすれば祝祭 ての 人々がよ

論との共通点が見てとれる。ル んだものであることもわかる。 らの引用からはたしかに、 ソー 舞台と観客席、 が『法律』を研究したことをふまえれば、この共通点はル 演者と観客の分離から、 その廃棄への移行 という点で ソー がプラト 『法律』 ンから学 の議

ル ソ による革新 人民への信頼と対等な者たちの集会?

観客が沈黙を強いられていたこと自体は批判しておらず、 の違いも浮かび上がってくる。というのも、『法律』の「アテナイ人」は、民主政以前のアテナイにおいて歌舞の これ らの引用をよく読むならば、『法律』における「シアトロクラシー」批判と、 観客が自分の快のままに非難と喝采をはじめたことを、 『手紙』における演劇批

疑問が生じてくる。

まず、

ル

が公衆の趣味と習俗につい

て語っている箇所を検討すると、ル

ソ

は本当に人民

てさきに引用し

た

『手紙』の有名な一節を、

『手紙』の

他の箇所と照らし合わせてみると、

6.1

<

つ

か 彼

の ら

íc,

判

断能

の語を

لح

であ

ル

能力を信頼

L

てい

たのだろうかという疑問が生じる。

ルソー

は、

む

しろプラトンと同じく、

人民

(の判断

能力

田中均

ルソーには、近代の思想家としての独自性がある。

それはすなわち、 個人が名誉を求め、

また恋愛の情念を追求して相互に競合する社会を前提として、

その競合関係を利用して国家の存続と利益を実現するという構想である。

シアトロクラシー 観客の美学と政治学

客の沈黙と参加との差異は、市民に対する法の有効性という観点からとらえられてはいない。 有しており、プラトンとルソーとの主要な対立点が、前者が 用いてはいない)[*3]。 のままの自己を相互に示し合うことで感情的に一体化した市民の集合とが対比されている。 客どうしが相互に分離されて孤立していること自体であるように見える。 力を否定するの 威を否定する大衆の僭越として批判している(そして次善の策として「ポリス全体がポリス全体」に対して演じる歌舞を提案す らも、 プラトンの プラトンとル 民を歌舞の法に受動的 へと参加させることで、 両者ともに否定されるのに対して、 演劇が「分離」によって「疎外する」ことであると指摘している(ただし、 これに対してル のできない」 0 「シアト 差異について、 舞台上の出来事からも、 は、法と共同体という観点から言い 『国家』とル ソー ロクラシー メンケはさらに進んで、 それとも肯定するのかという点にあると論じている「§」。 との差異をめぐるメンケやウィ 大衆が判断しようとすることであるのにたいして、 ソーが批判しているのは、 クリストフ・メンケは、 ・消極的に服従させていたが、 _ ソーの『社会契約論』を比較したデイヴィド=レイ・ウィリアムズ 能動的・積極的に法を遵守させることが提案された。 は否定する一方でデモクラシーを擁護する、 さらに他の観客からも分離・疎外された観客と、 ルソーにおいて「シアトロクラシー」はデモクラシ プラトンにおいて「シアトロクラシー」はデモクラシー かえることができる。 観客が舞台上の出来事から分離され、 プラト リアムズの議論はきわめて明快であるが、 それが観客の反乱によって挫折したため ンが批判する「シアトロクラシー」 「大衆」と呼び、 つまり、 ルソーが批判する と定式化する[*]。 後者が 『法律』の場合は、 ルソー自身は これに対して、 それらの疎外から解放され 「人民」と呼ぶ者たちの さらに客席 「シアトロ ーの「反対」であ 「シアト とは、 むしろ、 後述するよう は、 『手紙』 に、 沈黙と の暗闇 メ 「分別ある理性的 むしろ市 の ロクラシ ンケと見解を共 クラシー」 劇場外 「根源」

の場合、

Ö

現実

あ

n

いう仕方

民を上

のなか

で観

そこに、 的な するものの区別は、 では、 ジュネ とルソーとの対比 たの 方を描いてみせるときにも、 (少なくとも自分の同時代人たちのそれを)否定していたと考えることができる。すると、 後者の場合、 の諸個人を評価する判定者たちとのあい 「見せもの」 市民がありのままの自分を見せあい「自然」で「純粋」な共同体感情を共有するとい か メ どうかという疑問 ヴ共和国にふさわしい見せものとして挙げる競技や祝祭の例を検討すると、 ンケが ソー の 名誉をめぐって競争する個人たちのあいだの「分離」、 のイメージを示しつつ、 (プラトンは反デモクラシーでありルソー 「分離」されざる「対等な者の共存」としての「集会」と呼ぶものを見い 「シアトロクラシー」の差異と見なしたものは疑わしくなる。 プラトンが も生じる。 やはり維持していた区別であり、この点でもメンケによるプラ 『法律』において「ポリス全体からポリス全体に対する」 さらに言うならば、 他方ではそれと食い違う「見せもの」の構想も示してい だの 「分離」が見い はデモクラシー支持)は疑わしい。 ル ソ だされる。判定されるも 自身のうちに二面性があ そして、 また、 競合する諸個人 はたして彼が ル 0 り、 と判定 う理想 だして ソ ケが 一方 のあ が プ

会を前提として、 それでは、 性がある。 「見せも った、 ということに尽きるのだろうか。そうではない。 Ď 以上の検討から導き出される結論は、 それはすなわ をめ その競合関係を利用して国家の存続と利益を実現するとい Ź٠ って ち、 展開されて 個人が名誉を求め、 いるのが 『手紙』 ルソー また恋愛の情念を追求して相互に競合する社 というテク はその見かけに反して忠実なプラト ル ソーには、近代の思想家 ス } なのである う構想である。 ニス の

味 習俗 の 反映とし て の 見

『手紙』 は 演劇が観客に与える影響について論じた書物である、 という先入見をもってこの著作

田中均

まず当惑させられるのは、ルソーが『手紙』の冒頭で、

演劇を含む「見せもの」 は公衆の趣味や習俗に

つまり公衆を教育することはできないと強調していることである

「シアトロクラシー」と呼んだもの、

しかし、「シアトロクラシー」が帰結として「デモクラシー」をもたらすとプラトンが考える

その外部に存在する社会における公衆の

趣

味

ここでルソーが取り上げている、

習俗を反映しているにすぎないと考える。

のとは逆に、

ルソーは、「見せもの」のあり方は、

浄化〔排出〕して、〔すでに〕もっている情念を醸成する」(20)ことになる。

えて情念を矯正することはできず、

公衆を楽しませることを目的とせざるをえない (1←18)。

絶されてしまうため、

ることである。

を読むと、まず当惑させられるのは、

ルソーが『手紙』の冒頭で、

演劇を含む「見せもの」は公衆

つまり公衆を教育することはできないと強調

してい

つまり、

端的に拒 公衆がこ 趣味や習俗に影響を与えることはできない、

れまで持っている趣味や習俗を放棄させて、別の趣味や習俗を学ばせようとするならば、

「見せもの」はそれぞれの国民に特有の趣味や習俗に迎合することによって、

情念だけに働きかけるので、「演劇は人がもっていない情念を

ルソーによれば、「見せもの」は理性に訴

公衆の趣味と習俗の強固さは、『法律』においてプラ

ン

つまり快楽に基づいて判断する観客の支配とよく類似してい

ルソーによれば、もし「見せもの」が教育しようとするならば、

ダランベールに反対しているが、これは、演劇がジュネーヴの公衆に与える影響力を恐れてい の習慣を通じて市民のあいだに奢侈が広まり、 ネーヴ人にたいして演劇は良い影響を与えこそすれ、 ではないのか、と。演劇が、 ここで以下のような疑問が生じることだろう。 ソー できる。第一にルソー 人は萌芽的に備えているとみなしている。彼は、もしジュネーヴに劇場を建設すれば、 が自己矛盾しているのでないとすれば、この疑問に対しては以下の二つの仕方で答えるこ と考えているわけではなく、 は、 公衆がすでに持っている情念を助長するだけならば、素朴で善良なジュ 同時代のパリなど大都市の趣味・習俗とジュネーヴのそれとがまっ 大都市の演劇によって醸成されるような情念をジュ その結果市民は窮乏化するだろうと警告しつつ、 ル ソーは、ジュネーヴに劇場を作ることを勧める 悪影響を与える可能性はないのではないか。 んるから 観劇

ジュネー る」ことはできない。 に足を運ばない」だろう。しかし実際には、「商業と貪欲さのただなかでスパル で団結していた古代スパルタ人と同じ格率を持っているならば、「市民(Ciroyen)も準市民(Bourgeois)もけっしてそこ らば、ジュネーヴに見せものを設けても、なんの危険も冒さないでしょう」(61)。 へと向かう素質を潜在的に備えているのである。 のように述べる。「もしも仮にわたしたち〔ジュネーヴ人〕が、スパルタ人と同じ格率(maximes)をもつとするな ヴ人もまた奢侈への誘惑から自由ではないし、 つまり、ジュネーヴもまた国際的な商業と貨幣経済のネットワークに組み込まれている以上、 (後述するバリの上流階級に典型的な)利己主義と他者への無関心 タが再生するのを見ることを期待す もしも仮にジュネーヴ人が、質素

人、とり 民が劇場外の社会において俳優と接触して被害を受け、 に与える効果というよりは、俳優が劇場の外で自分の技術を用いることで社会に与える影響を指摘してお 述べる一方で、「私が俳優について非難するのは、本当にペテン師であるということではなく、 ような習慣の訓練をしていることです」(73)と述べている。 らゆる技術にわたって磨いていること、 の才能」とは、「自らを偽る技術」([1]'art de se contrefaire, 72f.)であると(ニーチェがのちにヴァーグナーを評するときのように) 第二に、 俳優が異性を誘惑したり、 わけ俳優がジュネーヴ市民と接触して感化することについて憂慮している。後者に関してルソー ルソーは、 演劇という「見せもの」それ自体よりもむしろ、 詐欺によって市民から金品を巻き上げたりする可能性を挙げている。 劇場においてのみ無害であり、そのほかの至る所で悪事にしか役立たない さらには加害者と同じ悪習に染まることをルソー この箇所でル パリをはじめとする大都市から流入する演劇 ソーは、 俳優の技術が劇場のなかで観客 人をだます才能をあ ジュネー Ď, ·は警戒 は、 具体的 · ヴ 市

俳優と恋愛 演劇 の背景としての利己主義

ではない以上、

ルソーが人民の判断能力を肯定していたとは言えない。

そうであるならば、

演劇の観客の分離

を疎外

田中均

の喜劇

この苦痛

61

の上流階 『人間嫌

同様の理由から、老人の意見が軽視され、 方が事態の一面 るかのいずれかであるとも批判する (46) (ここでルソーは、 いる)。 いる利己主義と他者への無関心であり、すでに商業のネットワークに組み込まれているジュネーヴ人もそれと無縁 無関係に女性の判断に従属していることを指摘する(43f.)(ここではまたルソー自身の女性蔑視も明らかである)。 公衆の趣味と習俗をめぐるルソーの議論から しかとらえてい ないことがわかる。 老人は若者の歓心を買おうとして滑稽になるか、そうでなければ嫌悪され ル ソー は、 『法律』で一貫して主張されている年長者による支配の原則を踏襲し ・が批判 ルソーが演劇による観客の分離と孤立を批判 しているのはむしろ、 演劇による疎外 の前提 したと さらに となっ う見

また彼は、パリの上流社会では、恋愛が過大な重みを持つ結果、

男性が女性の歓心を買うために、

内容と

ヌの

ル

はここで

趣味が俳優

を廃棄して集合を作り出すことで、 問題が解決するわけではないことも明ら かである。

を変えるために世論に従う 「元帥たちの裁判所

うほど、 てであると述べている(61)。というのも、「大多数の人々が知る唯一の幸福は、 俗を変えることはできないと指摘した上で、「政府が習俗に対して有効である」のは「世論」(opinion publique)によっ 透しようとしている趣味と習俗を変えることは、どうすれば可能なのだろうか。 公衆の趣味と習俗が「見せもの」 社会において人々は他人の意見に依存しているからである。 いとか望ましいとか判断したもの以外は、 のあり方を決定するならば、 個々人にとって何も善くないし望ましくもない パリ の上流階級を支配し、 幸福であるとみなされることである」 ルソーは、法による強制は趣味と習 ジュネ ヴの市民にも浸 , (62) 6.1

シアトロクラシー 観客の美学と政治学

そしてこの制度を通じて、 また世論に代 「元帥たちの裁判所」(62) を挙げている。 世論に働きかけることよって習俗を変える具体的な事例としてルソーは、ル 世論が決闘 わって元帥たちの判定によって、 の勝者に名誉を認めてきたが、「元帥たちの裁判所」は、 決闘によって紛争を解決することを正しいとする世論自体を変えることが目指された。 これは、 紛争の当事者の名誉と恥辱について判定し、 当時横行していた決闘を廃止するために導入された制度である。 1 決闘という暴力的な実力行使なしに、 十四世時代のフランスで創設された 処罰を与えたのである。

長者たちが、 可能なのは、 人の名誉では て最高の名誉を得た古参の軍人たちが判定者となっていることである (63)。 を是認し、さらには賞賛する世論を変えることは、 がこの制度で評価しているのは、「元帥たち」、すなわち、 勇敢さをあえて抑制する場合に限られるということである。 生命の危険をいとわない勇敢さを自らの身をもって証明し、それゆえに世論によって尊敬されている年 国家の利害のために用いられたということである。 単なる臆病から決闘に反対する者には不可能であり、 国家のために自分の生命を危険にさらすことに つまり、 もう一つの含意は、 このことの含意は二つある。 元帥たちは勇敢さを自分の利益の 元帥たちの勇敢さは、

シアトロクラシー 観客の美学と政治学

田中 均

は名誉と不名誉だけを判定すべきであって、強制的な罰を伴ってはならない。また、 ら完全な独立を保たねばならない、 ためではなく国家のために発揮したので、彼らは個人的な名誉のための決闘を賞賛する世論から独立しているととも たちへの世論の尊敬こそが、世論と習俗の変化の原動力となるべきであるし、それ以外のものは変化を引き起こせ ただしルソーは、「元帥たちの裁判所」の制度において改善されるべき点も指摘している。まず、この「裁判所」 私心のない公平さを体現しており、それゆえに世論を批判し、新たな制度によって風習を修正できる立場にある。 という考えからの帰結である。 つまり元帥たちもまた強制されてはならない。 これらの批判は、 判定者である元帥たちは政府か 判定者である元

ル 府の方針から自律的であるべきだ、という前述の考え方の徹底である。 ら ことである。ここからは、 べきである、というのである。このルソーの議論は、二つの面から理解できる。 による解決を認めるか禁止するかを含めて判定すべきであるし、さらには、元帥たち自らが決闘する権利を行使する ソーが認識していたことが改めてうかがわれる。 いうのも、 ル 世論から逸脱する決闘の禁止を個別的に作り出すことによって、 決闘を是認する世論を修正するためには、いったんその修正されるべき世論にしたがって、決闘を実践 ソー は すなわち、 「元帥たちの裁判所」について、 彼は、決闘に代わる裁定の制度という「元帥たちの裁判所」の趣旨と矛盾しかねない提案をし そもそも最初から決闘を一律に禁止するべきではなく、元帥たちは個々の紛争について、 定着している世論とそれにもとづく風習とを意図的に修正することが非常に困難であると もう一つ改善すべき点を挙げているが、これは注目すべきものである。 漸次的に世論の変化を図らねばならない もう一つは、尊敬されている元帥たちです 一つは、判定者である元帥たちは政 L という たうえ いるか

ュネーヴのための「見せもの」における承認をめぐる闘な

で取り上げた 「元帥たちの裁判所」 は、 習俗を修正するために世論に訴えかける制度だが、 これに対

世論を通じて風習に働きかけようとする制度なのである。 者は無関係であるように見えるが、どちらの場合も、 とによって、競争が暴力的な闘争に発展することを抑止し、 がジュネーヴにふさわしいものとして提案した、舞台と客席の分離を廃棄して観客自体を演者とする「見せも ジュネーヴの素朴で善良な習俗を維持・強化し、共同体の感情を促進するための制度である。 他者から承認されたいという個々人の利己的な欲求に訴えるこ 国家の統合を強化しようとしている。 つまり両者とも、 一見すると両

まる一年保持する」(118) とされる。 なった若者が、〔評議会の〕代理人の手を通じて冠を授与され、舞踏会の女王の称号を与えられ、彼女はこの称号を それまでの舞踏会を通じてもっとも礼儀正しく、 う欲求が働き、参加する若者たちのあいだで競争が生じることになる。 れている。たとえば、 実際、 いる全員の賞賛ないし羨望の対象となるだろう。 の相手を選ぶ場であり、ここには、(すでに恋愛の情念に関して言及したように)自らの望む相手から選ばれたいとい であるが、 での旗取り競技である。また、 ル ソーが挙げている「見せもの」の事例には、競争と、その勝者に対する名誉の授与という要素が組み込ま その他さまざまな身体訓練のための体育賞を設け」(116) て行われる競技会、また、漕艇技術を競う ここにも競争的な性格が見て取れる。たとえば、 彼が野外での「見せもの」として提案するのは、「軍隊の賞をモデルとした、 彼が冬の屋内の「見せもの」として提案するのは、「婚期の若者たちの舞踏会」 またこの舞踏会自体が、 もっとも穏やかに振る舞い、 父母を含めた年長者の監視のもとで若者たちが出会い、 ルソーの提案によれば、「毎年最後の舞踏会で、 もし望む相手から選ばれるならば、 誰よりも審判席(Parquet)の判断にか レスリ

で競争が行われることによって、 の再生産というように、 や情念が競争する場所として制度的に設けられたものである。そこでは、国家の代表者と年長者たちの そして、 その異性を独占しようとする恋愛の情念を、 が提案する「見せもの」は、他者に優越することで世論に認められようとする名誉欲や、 体育競技・水上競技の場合は兵士にふさわしい身体の育成、若者の舞踏会の場合は家庭の形成と次 競争が国家の利益を促進するような制度が設計されているのである。 個々人の名誉欲や情念が社会を分裂させるような抗争へと発展することが抑 一方的に否定するのではなく、 その存在を認めた上で、 特定の異性の関心 止され 個々人

*6

があ 粋」で「自然」な共同体感情によって満たされた人々の集まりに他ならないではないか、 盃、愛撫」の光景である たちによる自然発生的だが整然とした踊り、そしてそれに続いて兵士とその家族たちが繰り広げた「抱擁、笑い、 の父親は息子に「彼らはみな友であり兄弟だ」と語ったという。 りうるかもしれない。その光景とは、ルソーが少年時代に目撃したという、「サン・ジェルヴェの連隊」の兵士 の解釈に対しては、 『手紙』の最後に描写されている共同体の光景とはあまりにもかけ離れているという反論 少年ルソーはこの光景に対して「普遍的な感動」(un attendrissement général) を感じ、 これは制度化された競争などではなく、 そう言いたくなるかもしれ 乾 ル

平等で統合された共同体がよみがえることはないという認識を持ち、その前提に立って近代人にふさわしい「見せも 俗にふさわし 同体のイメー この反論に対してはこう答えられる。ここで語られているルソーの少年時代の記憶とは、 の可能性を展望している。 ジ 「見せもの」を構想しているのである。すでに触れたように、 でしかない。 ルソーは他方で、 そしてここに、 プラトンに対するルソーの最も重要な独自性が認められるのである。 この理想が現実には(もはや)存在しないことを意識して、実際の習 ルソーは、 「スパルタ」に象徴される あくまで理想化された共

大阪大学准教授(COデザ ひとし) インセンタ /大学院文学研究科)。 専門領域はドイツ語圏

均(たなか・

を中心とする近代美学、芸術における「参加」をめぐる諸問題。

註

※本研究はJSPS科研費26770044の助成を受けたものです。

*1 | ジャン=ジャック・ルソー『見せものについてのダランベー ル氏への手紙』は以下の版から引用し、 頁数を示す。

Jean-Jacques Rousseau, Œuvres complètes, tome V, (Gallimard, 1995).

一ルソーがプラトンの著作を詳細に研究したことは文献学的にも知られており、 本稿では以下「シアトロクラシー」の表記に統一する。

*2

律』に行った書き込みについての研究である。

以下の論文はルソーがラテン語訳『法

比較をしている。 M. J. Silverthorne, "Rousseau's Plato," in Studies on Voltaire and the Eighteenth Century, 116, 1973, pp. 235-49. また、ルソーとブラトンの政治哲学全般については、デイヴィド=レイ・ウィリアムズが以下の著作において詳細な

David Lay Williams, Rousseau's Platonic Enlightenment, (Pennsylvania University Press, 2008).

Rousseau's Social Contract, (Cambridge University Press, 2014).

- *3 Christoph Menke, "Die Depotenzierung des Souveräns im Gesang. Im Blick auf Claudio Monteverdi: Die Krönung der Poppea, "in Eva Horn (Hrsg.), Literatur als Philosophie -Philosophie als Literatur (Fink, 2006) S.283
- A. a. O. S. 284.

*5

シアトロクラシー 観客の美学と政治学

- seau's Social Contract, Kindle edition) ては、もっとも普通の精神でさえ、「正義の真の原理、美の真のモデル、存在のすべての精神的関係」を知る能力がある。イデアは少数者のみに到達可能である一方、ルソーの良心の概念は理論的にはあらゆる人に現前する。 ルソーにとっ なのである。 とっては、 正義や善を決して理解できないのであるから、立法や統治からは大衆が大部分排除されている。 最も重要なもの のデモクラティックな政治を促進する。 この鍵となる想定が、ルソーが人民主権の教説を主張する前提なのである。」(David Lay Williams, Rows それらは「すべて知性に刻印されている」からである (…)。(…) 普通の人々が正義を理解する能力こそ を区別する。プラトンのソクラテスにとって大衆は決して哲学を実践することができず、 ンの〕 差異は大部分、永遠のイデアへの認識論的なアクセスの程度の問題から生じる。 -一般意志の源泉である正義そのもの そしてこれが、大衆の政府をあからさまに断罪するブラトンの『国 は人民が知っているので、 人民が立法すべき ルソーに
- |「このフィラントは、 何事 ても、嘆きもせずに見ていられる人々です も気にかけていないので、すべての人々にいつも満足している人々、けっこうな食卓を囲んで、 すが、上流社会の紳士の格率というのは詐欺師のそれにとてもよく似ています。それは、とても穏やかで、控えめで、 もすばらしい穏やかさを神から授けられているのですから。」(36) いうのは事実ではないと主張する人々、財布をいっぱいにして、貧者のために弁じるのはとても不適切なことだと思 もよりよくならないことに関心を持っているので、万事がうまくい 自分の家はしっかり戸締まりして、たとえ全人類が盗まれ、荒らされ、喉をかききられ、皆殺しにされたとし この作品の賢人です。 彼は上流社会の紳士の一人 (un de ces honnêtes gens du grand monde) で というのも、この人々は、 っているとつねに思っている人々、 他人の不幸を耐え忍ぶことができる、 人民が飢えていると 誰のこと